

【大会見聞録】

第 10 回アジア・オセアニア老年学会議に参加して

加賀美 弥生

東京都健康長寿医療センター研究所

2015年10月19日から22日まで、タイ王国北部の古都チェンマイにおいて開催された第10回アジア・オセアニア老年学会議 (IAGG2015) に参加いたしました。チェンマイはエネルギーな雰囲気のパンコクとは異なり、落ち着いた感じのする街で、昭和時代の風景を思い起こさせます。学会会場はチェンマイ中心部から少し離れたところにあり、行き帰りにはソントウという乗合タクシーを愛用しました。赤い小型トラックに長椅子と赤い屋根がついていて、正面から見ると霊柩車のような姿をしています。料金は運転手さんと交渉。街を眺めると、走っているのは日本車が大多数です。所々に国王や王妃の写真が飾ってあり、王室に対する一方ならぬ尊敬の念が表わされています。タイは19世紀に周辺諸国が軒並み欧米列強に植民地化されていくなか、独立を維持しました。隣国ビルマとベトナムがそれぞれイギリス領、フランス領になって、強国に挟まれたという地理的な状況に加えて、国王ラーマ5世が外交力を発揮し、また国内にあっては近代化を進めたことが、独立を維持できた背景にあったようです。日本が文明開化で近代化に邁進している頃、タイも近代化に奮闘していたと思うと「同志よ!」と呼びかけたくなるよう

なシンパシーを感じます。もちろん私はその頃生まれてはいなかったのですが、ちなみにラーマ5世のお名前が Chulalongkorn で、今回の大会長を務めた Jitapunkul 教授が教鞭をとっておられるタイを代表する大学の名前の由来になっています。

さて、大会には日本、オーストラリア、タイを中心に1,115人の研究者が集まり、“Healthy Aging Beyond Frontiers”をテーマに、社会政策などの政治的問題から高齢者の社会参加、介護分野、認知症や心疾患、虚弱などの老年医学、生物学的基礎研究など幅広い分野の研究発表が行われ、活発な議論がなされました。大会の規模がさほど大きくなく、基礎研究もセッションの分野が細分化されていない、というかできない分、様々な研究を拝聴できる楽しい機会でした。惜しむらくは私の英語聞き取り能力が今少し…以下略します、お察し下さい。ともあれ、地元タイからの参加者の研究を一部ご紹介いたします。Mahidol 大学の Govitrapong らはメラトニンに着目した研究を精力的に行っています。一例として、メラトニンがレセプターを介して I κ B の分解を抑制し、NF- κ B の核内移行を阻害することで慢性炎症に対して保護的に働くことを明



オープニングセレモニーの様子

らかにしています。メラトニンは加齢によって減少することから、脳の老化とメラトニンとの関連が示唆されます。また、Chulalongkorn 大学の Mutirangura らは、エピジェネティックな DNA の脱メチル化がゲノムの不安定性に関わるしくみを研究しており、加齢によりゲノムのメチル化が減少すること、繰り返し配列 Alu のメチル化レベルが細胞の増殖や新生児の成長速度に影響を与えることを明らかにしています。さらにある種の endogenous DNA

double strand breaks (EDSBs) 周辺の高度なメチル化が正常な EDSBs の維持に関与する可能性を示しました。他にも日本をはじめ韓国、インド、ロシア等の研究者らによる興味深い発表がたくさんありました。2050年には韓国、中国、タイ、ベトナムでも日本を追うように高齢社会を迎えることが予想されています。日本だけでなくアジア・オセアニア各国においても老化研究の重要性が増していることを実感しました。



民族衣装を着たモデルの方たちとともに。左右から2番目は一緒に参加した健康長寿医療センター薬剤科のスタッフ、石神理事（左から3番目）、筆者（左から4番目）